アーティストインタビュー
渡部ギュウさん（東北えびす）

—幼少期から今に至るまでのお話を伺えますか

渡部：出身は山形県の庄内町です。幼少期になんかいろいろあった人が多いよね、演劇やってる人って。もしかすると。音楽家は違うもんね。お父さんお母さんが音楽やってて、それを聴いてとか。で、音楽家になるんだけど。俳優の場合ね、そうだよね。うちは農業やってたんだけど。そうそう、ちょっと病気がちな子で、紫斑病っていう大きな病気を 4 歳か 5 歳にやって。小学校 1 年生、2 年生ぐらいまであんまり、幼稚園も小学校も行ってないんですよね。身体が弱くて。それで、無口な、友だちもいない、寂しい。村で同学年が 2 人。同級生女の子だったんで、寂しい小学生（笑）。ちょっと事件があって。転校したんですよ、小学校 3 年か 4 年の時に。ちょっとお袋が蒸発して。もう農業って大変だから。うちのばあちゃんにいじめられて、嫁姑問題で、お袋が蒸発しちゃったのね。で、お袋呼び戻すために、うちのおやじが農業をいったんやめるって言って、うちのおやじが弟に農家を譲って、で、町に、ちょっとした離れた町に出たんですよ。で、そこで学校を転校したので、それを機に、担任の先生が良かったのか、ちょっとスポーツとかやり始めて自信つけて。小学校 4 年以降はサッカーとかやり始めたんで、体育会系なんですけど。小 3 までは虚弱体質。まず人と話さない、喜怒哀楽がない。非常に寂しい、ひょろっとした男の子。そっから小 4 からスポーツ系。高校卒業するまで。高校もスポーツ。バスケットボールやってたんで。小学校でサッカーでしょ、中高がバスケットボール。で、受験に失敗して、というか、なんかもう一浪するの嫌だったので、とりあえず町から離れたかったので、なんかあんまり、田舎というものが自分の中でこう、自分をウエルカムに包んでくれる場所ではなかったんですよ。ちょっといろいろ、いじめられてもいたし、低学年の頃ね。で、中高はそこそこ勉強もできたんで、スポーツもできたんですけど、なんかちょっと居心地の悪さみたいなのがずっとあって。で、仙台の大学に入って、で、勉強もしないで。国分町でずっとアルバイトをして、社会ウオッチングというか人間ウオッチングというか。今でも変なとこありますけど。若い時はより、へそ曲がりというか変な感じで社会を見てたんじゃないかなという気はしますね。

—演劇を始めたのはいつだったんですか？

小学生ぐらいからなんか俳優ってかっこいいなと思ってて。で、いつか演劇みたいな舞台を経験したいと思って。とりあえず学院大学に入ったんで、演劇部にすぐ入ったんですけど。先輩や同級生にお前は変わってる変わってる言われて、そうかなと思いつつ。１年ぐらいで辞めたんですけどね。

—演劇を、興味はありつつ、高校まで特にやるっていうことはなく。

そうです。学芸会ずっとやってるぐらいで、ないですよね。本格的に、またそんなところないですよね。山形の片田舎で、レッスン、養成所があるわけでもないし、劇団があるわけでもないし。本当に仙台出てきて、初めて十月劇場っていうところの劇団の芝居を観て、白鳥ビル 8 階で観て、それがあまりにも強烈だったので、いわゆるカルチャーショックですよね。こんな表現があるんだと思って。それで、十月劇場に入ってみようと。大学３年時に入団させてもらいました。大学のサークル活動がちょっと合わなかったというか、もうちょっと本格的にやりたかったのですぐ辞めて。大学 2 年の時は東京行ったりしていろんな劇団を観て。で、大学休学して東京の劇団、新劇系に行こうかなと思ったんですけど。その前に観てたんですよね、十月劇場。実は大学１年の冬に観てたので。そのあまりの強烈さで、その強烈さを超える劇団が、劇団っていうか、新劇だからね。東京はもちろん大きい劇団で、本当にちょっと毛色が違ってたんだけど、なんかその十月劇場が、非常に自由でのびのびとプレイをしているし、野性味あふれて面白い劇団だなと思ったんですね。で、いろいろしてるうちに、やっぱり仙台でいいやと思って。で、入ったんですね。

—20 代の頃とか、何か記憶に残っている出来事だったりとか、今までずっと演劇の第一線で活躍されていて、なんか残っている出来事はありますか。

渡部：そうね、20 代はもう無我夢中でやってたので、たぶん十月劇場に入ってたのは、史料上、1980 年代中盤、バブルがちょっと弾ける前ぐらいで、このあとバブルはじけてっていう。デパートでアルバイトしてましたので、靴の修理とかやって。売り上げがばーっと、駅ビルでしたけどうなぎのぼりでしたから。た

ぶん 1995 年ぐらいまでは景気もいい時代だったんじゃないですかね。全体的に東京のアンダーグラウンドが少し、松本の演劇祭とか、少しアンダーグラウンド、小劇場でも作品として売れるっていうか劇団として売れるいう時代になって、また小劇場からどんどんいい、面白い俳優たちがドラマに映画に出るっていう時代になってって。その前の紅テント、黒テントのアングラ時代からもう少しこう違う雰囲気になってたので。非常に『演劇ぶっく』なんていう雑誌も出て、演劇もポップなラインを歩み始めたみたいなところでしたから。

仙台・宮城とネットワーク作って、東北演劇祭みたいなことをやってたんですよね。で、秋田には究竟頂っていうテント劇団があって、山川三太さん。のちに東京に出ますけど、みんなで。なんか、東北の演劇がこの 80 年代、ちょっと注目される時期があって。その前寺山修司さんがいたんですけど、寺山さんとはまた違うところでちょっと注目される時代があって。そんなかんなで、東京の小劇場ブームの人たちが、東京のムーブメントが新しい流れで入ってきたのに 10 年ぐらい遅れて、素朴な、いわゆる身体を使った、身体表現の強い、それから身体言語に東北弁が入っていたり、東京にはないぞみたいなテイスト。たぶん 1960 年代 1970 年代の唐さんとか寺山さんとか、よきアンダーグラウンドの先輩たちのものを受け継いで、違う発酵の仕方をしてたみたいな。なんかその、ちょっと、独特な（笑）、発酵の仕方をしてたような感もあるんですよね。

それで、十月劇場で、定禅寺通りという一等地にアトリエ、稽古場兼劇場を持ってたので、ちょうど 24 坪ぐらいで。ぎゅうぎゅう詰すると 80 人から 100 人入れる小屋でしたから、その小屋と、何年だろう、1990 年、1989 年ぐらいにテントを作って、銀猫テントっていう。で、テントで年一度、夏に全国ツアー行くっていうの、アトリエとテントでダブルでやってて。なぜか入団して 3 年目で制作をやってたんですよ。で、4 年目で舞台装置もやってたので。で、役者もやり。だから、それが非常に面白い経験になり、特に制作やってるので、前乗りしていろんな、名古屋の演劇人とか大阪の演劇人とか、金沢の演劇人、新潟の演劇人とか、制作で半年前に行ってまず会って、公演の 2、3 ヶ月前に行ってまた酒を飲んで、いろいろ情報収集して出会っていくわけですよね。それが非常に面白かったですね。

東京は東京で、逆に仙台のうちのアトリエ劇場に足を運んで、作品を持ってきてくれる先輩たちもいて。で、そこで早稲田系列の元早稲田小劇場にいた千賀ゆう子さんとか、そのあとドラマ館になって。あとは早稲田でお神楽と演劇を研究

している丹下一さんとか、あと秘法零番館の竹内銃一郎さんとか、いろんな方と知り合えるようになって。かな。制作やってたからじゃないですかね。20 代のうちにだいたい、みんな紹介してくれて。仙台の十月劇場の米澤牛っていう芸名だったので、ギュウちゃんですって言って、制作もやるし役者もやるしって。で、26 歳ぐらいの時には、年 1 回ぐらい東京呼ばれて、岸田理生＋楽天団に客演させてもらったり、U フィールドっていう転形劇場の若手たちが作ってた劇団に出させてもらったりとかしてたので。そういう諸先輩たちとの稽古、作品作りっていうのが、ものすごい強烈でしたね。だから、一番外の演劇情報なり、もちろん演劇の技術的手法、思想的なことも含めて、自分で持ち帰って、仙台でなんとか伝えたいなと思ってた頃ですかね。だから逆に劇団を辞めたのかもしれないですね。劇団で、制作で借金もたまって、みんな働かないし嫌になったっていうのもあるんですけど、より外に出て、演劇を通していろんなことを知りたいなと思った。思い切って辞めた時期でもあった。だから 20 代、強烈な思い出としては、やっぱりテントを買って作って、8 年近く旅をしたっていうのが強烈ですかね。

大河原：85 年から。だから、37 年芝居をやられていて。なんでですかね？夢破れた人もいるし、なんなら仲違いして一緒にできなくなったりとか、辛い思いもたくさんしてきたけど、なぜ演劇を、智さんはギュウという名前のまま放さないんだと思いますか？

渡部：なんかさ、完全燃焼してないのよ。サッカーの三浦知良状態なのよ。完全燃焼したいのよ。結構ね、昔、自分でもね、なんて言うんだろう、なんかがね、原発並みのさ、エネルギーが自分から出てるような気がしてたのよ。ぎゅわーって、エネルギー発散型というか、テントだったしね。石川の前で完全燃焼してた何ステージかがあって、その感覚をもう 1 回取り戻したいのよ。今度やる『リア王』で、宮島春彦っって面白い演出家で、自己解放させてくれる演出家なのよ。で、何人かいるのよね。斉木耀っていう面白い演出家が昔いてさ、で、自分を自己解放させてくれる現場、もしくは演出の前でもう 1 回プレーしたい。それがいないんであれば、自分で完全燃焼できる企画を考えたい。完全燃焼よ。全てを忘れて、それだけに気狂いのように向かっていくような、パワーと集中力とエネルギーをもう 1 回放出できないかなっていう感じなのよ。昔、何回かそういう

経験あったので、そこには辛い稽古といろんなのもあったんだけど、そういう場所をもう 1 回獲得するっていうこと。自分自身のあれとしてね。

　あとは、演劇を通してみんなハッピーにならないかなっていう。壮大な夢（笑）。演劇の話をしながら美味しいもん食べたり美味しい酒を飲んでたり、みんな笑ってたり夢中になって話してるっていう時間が好きなのよ。この 2 点かな。もう 1 回完全燃焼したいっていうのと演劇というツールでみんなでばか話したいって。この楽しさ。わがままだよね。たち悪いよね。自分が散々爆発して、なおかつみんな楽しくやってくれって（笑）。はい。そういうなんか。っていう、答えになってますかね。

大河原：なってます。